

青山フィルハーモニー管弦楽団

第40回外苑祭コンサートプログラムパンフレット別冊

発行日：2009年9月5日

編集・発行：青山フィルハーモニー管弦楽団

プログラム

曲目

ベルリオーズ / 劇的物語『ファウストの却罰』より「ハンガリー行進曲」

久石譲（岡村繁編曲） / 映画『もののけ姫』より「アシタカせっ記」

ドヴォルザーク / 序曲『謝肉祭』

日時：2009年9月5日（土） 6日（日）

開場時間：11時

受付開始時間：11時30分

プレコンサートトーク：12時15分

開演時間：12時30分

会場：東京都立青山高等学校体育館

指揮者

永田理恵（ベルリオーズ）、岡村繁（久石）、坂井愛梨（ドヴォルザーク）

コンサートのききどころ

今年で40回目を迎える外苑祭コンサートは、ベルリオーズのハンガリー行進曲で幕を開けます。

この曲は、ドイツロマン派の文豪ゲーテの傑作『ファウスト』を基に作られた劇的物語『ファウストの却罰』（1846年）に登場します。

ハンガリー行進曲の名は、この曲がハンガリーの民謡であることに由来します。また、1701年から1711年にかけて起きたハンガリー独立戦争の指導者ラコツィ・フィレンツ2世（1679-1735）のお抱え作曲家が作ったともいわれ、「ラコツィ行進曲」の名前でも知られており、現在でもハンガリーでは祝典などでは必ずと言ってよいほど演奏される作品です。

後にブラームスやリストも引用した旋律を、ベルリオーズはその巧みな管弦楽法によって華麗で勇壮な行進の情景を描き出しています。

続いて演奏されるのは、久石譲の映画『もののけ姫』より「アシタカせつ記」(1997年)です。

宮崎駿の監督作品として、当時の日本映画の歴代興行収入第1位を記録し、主題歌を歌った米良美一のカウンターテナーの歌声が話題を呼ぶなど、一種の社会現象まで引き起こしたのが、『もののけ姫』でした。

「アシタカせつ記」の「せつ記」は宮崎の造語で、「歴史書に残されることなく、人の耳から耳へと伝承された物語」を意味し、「せつ」も、草冠に「耳」が二つ並ぶという造字がなされています。

『もののけ姫』の主人公アシタカの活躍の様子を音楽化した「アシタカせつ記」は、中世から近世へと移行する当時の日本の様子を下地としつつ、そこに生きる人々のあり様を描く作品です。

今回は、指揮を担当される青フィル顧問の岡村繁先生が編曲を行い、映画の世界を生きいきと再現します。

最後に取り上げるのは、外苑祭コンサートでは5年ぶりの登場となる、2009年度の青フィルの年間曲でもあるドヴォルザークの序曲『謝肉祭』(1891年)です。

この曲は、演奏会用序曲3部作の第2曲目として、『自然の中で』(1891年)、『オセロ』(1892年)とともに作曲されました。

初演時には「自然と人生と愛」という題名の下で、それぞれ『自然の中で』、『謝肉祭』、『オセロ』ではなく、『自然』、『人生』、『愛』と呼ばれていました。

しかし、ドヴォルザークは1894年になって「自然と人生と愛」という主題を改め、今日のように呼び名を与えるとともに、3つの序曲をそれぞれ独立した作品として位置づけたのでした。

当初『人生』と呼ばれた『謝肉祭』は、冬の悪霊追放、春の豊作と幸運祈願に由来し、仮装行列を伴う、ローマ・カトリック諸国の祭りであるカーニバル(謝肉祭)を描いた作品です。

しばしば熱狂と喧噪の祝祭となるカーニバルの様子を彷彿とさせる華やかな旋律で始まる序曲『謝肉祭』は、自由なソナタ形式を採用しており、フルートとオーボエが奏でる美しい旋律にヴァイオリンの叙情的な独奏、そして主題の再現を経て活気と情熱の高まりの中で華々しい終わりを迎えます。

いずれも40回という節目の外苑祭コンサートを迎えるにふさわしい三つの曲をどのように皆様にお伝えするか。青フィルの演奏にご期待下さい。

青フィルの情報は下記のサイトで随時ご案内しております。

<http://aoyamaphilharmonic.hp.infoseek.co.jp/index.html>

外苑祭コンサート 40 回記念インタビュー

青フィルの外苑祭コンサートは今回で 40 回目を迎えました。そこで、青フィルの創立者の一人である関治恭氏に、最初の外苑祭コンサート開催当時の思い出を伺いました。

青フィルが発足したのは、関さんが高校 2 年生のときだったそうですね。そうです。青フィルは、私が青山高校の 2 年生だった 1969 年にその形ができました。その頃の青山高校には、音楽系の部活動としては軽音楽部、合唱を行なう音楽部、そしてクラシックギター部などがありましたが、オーケストラはおろか、吹奏楽部もありませんでした。私は当時新聞部に所属していたのですが、当時の新聞部の部室は部室棟の 2 階にあり、隣が軽音部の部屋でした。そして、部室にいると軽音部の人たちが練習しているのが聞こえてくるのですが、最後のアドリブなど、ジャズの素人であった私にも、「えっ」と思えるようなもので、ついつい気になってしまうことがよくありました。

そうでしたか。それでは、当時の音楽の授業の様子はいかがでしたか。当時、音楽科を担当されていたのは「カバさん」の愛称で親しまれた鈴木昇先生でした。長く青山高校で教鞭をとられたため、鈴木先生には多くの在校生がお世話になったものです。その鈴木先生については、今でも鮮明に覚えている出来事があります。あるとき私が化学講義室で授業を受けていると、特別教室棟の最上階にあった音楽室からピアノの音が聞こえてくるのです。断片的に流れてくるその音を聞いても、何の曲だか分からず、そのためにますます気になってしまい、化学の授業よりもピアノの音に耳を傾けていました。そして、授業が終わるころになって、その音がベートーヴェンのピアノソナタ「月光」であることにやっと気づきました。鈴木先生はあの激情に満ちた「月光」第 3 楽章の冒頭の激しい旋律を、文字通り訥々と一音一音弾いていたのです。これは、レコードで聞く音楽にばかり慣れていた私にとってはとても衝撃的な出来事でした。

それは貴重な体験ですね。そうした経験も、青フィルを作る上で役に立ったのですね。そうですね。鈴木先生の授業はいろいろな意味で印象的でしたし、実際に青フィルの活動も、この授業の中から生まれたと言ってもよいほどなのです。

それはどういうことですか。高校 2 年生のとき、私たちのクラスは水曜日の 5、6 時限目が選択で音楽の授業だったのですが、鈴木先生は私たちのために授業を少し早めに切り上げてくれることがあったのです。そういったときに、後にドイツのエッセン国立音楽大学で学び、現在は札幌交響楽団のオーボエ奏者を務める高井明君や、東京芸術大学音楽学部楽理科に進み、音楽学者になる坂崎紀君、あるいは現在ニューヨーク総領事を務める西宮伸一君といった友人たちと楽器を持ち寄って遊んでいたのが、青フィルの雛型ともいえるべきものだったのです。

そうだったのですか。その頃の青フィルの様子はどのようなものだったのですか。名前こそ「青山フィルハーモニー管弦楽団」でしたが、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、フルート、クラリネットという顔ぶれでしたから、こうした偏った編成の曲などなかなかありません。そこで、作曲を学んでいた坂崎君や西宮君などがバッハの「フーガの技法」などの既存の曲をわれわれの楽器編成に合うように編曲してくれたのです。そうした曲を、皆で集まって練習し、あるいはそうした曲で遊んでいました。私は中学校のときに少しだけ吹いたことのあるフルートを担当することになったのですが、楽器をもっていなかったため、フルートをもっていた同じ青フィルの仲間から楽器を借りて、練習したものです。

そのような練習の成果を発表しようとした 1969 年の文化祭は開催されませんでしたね。そうなのです。1969 年度の文化祭は、開催前日になって学園紛争の影響で中止となってしまったのです。この年、私は文化祭委員長でしたが、9 月 12 日に中止が決まり大変残念な思いをしたことを覚えています。

そして、1970 年の文化祭でいよいよ青フィルの演奏が行なわれましたね。

3年生になって渋谷のヤマハで2万5千円の楽器を購入し、東邦音楽大学で教鞭をとっていた菅原早苗先生に師事することになり、放課後青高から保谷の菅原先生のお宅まで伺っていました。文化祭は、1970年度から「外苑祭」として再出発し、10月3、4日に開催されました。青フィルも1年越しでお披露目の演奏会を開くことになったのです。私は前年度の文化祭委員長として、2年生の委員長の相談に乗ったり、当時所属していた演劇部の公演の合間を縫って青フィルの演奏を行なったりと、3年生なのに大変忙しい思いをしました。今では考えられないでしょうが、当時は3年生だからといって引退などしませんでした。

最初の外苑祭での演奏の様子はどのようなものでしょうか。

当時の外苑祭での演奏は、今のように体育館で行なうというようものではなく、常時扉を開いたままの音楽室で、クラシックギター部や音楽部などと交代で演奏していました。来場者の数も、今のように一回で500人以上の方がいらっしゃる、というのではなく、青フィルの演奏者がそれぞれの家族や友人たちに声をかけて来てもらうという程度のものでした。それほど広くない音楽室の半分が客席、残りの半分が演奏者の席という具合でしたから、観客数は40人程度といったところでしょうか。また、演奏する曲も、現在のように管弦楽の曲を取り上げるのではなく、先ほど申し上げたような編成に偏りのある、しかも難しくない曲を選ばねばなりません。このときは、前述の「フーガの技法」や、バロック時代の作曲家ディートリッヒ・ブクステフーデのミサ曲などを編曲して演奏しました。

ブラームスやワーグナー、サン＝サーンスから映画音楽までが当然のように演奏される現在の外苑祭コンサートとは大変な違いですね。

今とは全く違う演奏会であった、ということは間違いなく言えるでしょう。

そのときの思い出はいかがでしたか。

私も中学校の友人などと呼んだのですが、人前で演奏するというのは初めての経験でしたから、とにかく必死だったことしか覚えていませんね。

最後に、青フィルの皆さんへの一言をお願いします。

私たちは「軽音楽でも合唱でもない、もっと違う曲を演奏したい！」という気持ちから青フィルを作りました。いわば自分たちで演奏したい曲を演奏するために青フィルを作ったのであり、自分たちが青山高校を卒業すれば青フィルというものもなくなるだろう、という程度にしか考えておらず、今日のような規模の大きな、意欲的な活動をする団体になるとは予想もしていませんでした。これは私たちの下からの世代の皆様の努力に追うところが大きいです。現在の青フィルはまさに「継続は力なり」という言葉を象徴しているようで、本当に喜ばしいことです。青フィルの皆さんには、義務感として音楽に取り組むのではなく、「どうすれば自分たちがやりたいように演奏できるか。」という気持ちで活動してもらいたいと思います。自分を抑えようとするのではなく、自分たち一人一人がやりたいことができる活動するために、どうしたらよいかを考えていただきたいと願っています。

今日はありがとうございました。

こちらこそ、ありがとうございました。

聞き手：土橋直友氏（青山フィルハーモニーOB・OG オーケストラ代表）
（2009年8月22日実施）

関治恭（せきはるゆき）氏略歴

1952年生まれ。青山高校在学中に青フィルの創設に参画する。その後、立教大学交響楽団、東村山交響楽団などのフルート奏者を経て、1989年に青山フィルハーモニーOB・OG オーケストラの指揮者に就任し、2001年まで同団の指揮者を務める。また、この他に2004年に行なわれた立教学院創立130周年記念演奏会では指揮者小松一彦氏の副指揮者を務めた。これまでにフルートを菅原早苗、音楽理論と指揮法を木津芳夫氏に師事する。